

【機密指定：レベルΩ】

CLASSIFIED — Ω-LEVEL CLEARANCE REQUIRED

ヒロイン分類学序説

—— 分類群別脅威度評価および最適攻略法の体系的研究 ——

Prolegomena to Heroine Taxonomy:

A Systematic Study of Threat Assessment by Taxonomic Group and Optimal Subjugation Methodologies

統合悲嘆機構【デスペラード】

ヒロイン対策総合研究所（IHCRI）

Institute for Heroine Countermeasure Research and Intelligence

著者

暗黒 絶学（くらき ぜつがく）

Dr. Zetsugaku Kuraki

IHCRI所長 兼 デスペラード最高学術顧問

悲嘆学博士（闇の大学院大学）

『IHCRI Bulletin』 Vol.66, No.6, pp.1-66, 2026

受理日：暗黒暦26年 第三新月 嬉評決定日：同年 第五新月

※本稿の無断複製・漏洩は組織規定第七條により極刑に処されます。

要旨

我々統合悲嘆機構デスペラードは、過去半世紀にわたり無数の作戦をヒロインと称される個体によって妨害されてきた。しかしながら、我々の敗北の大半は、ヒロインの多様性を無視した画一的な作戦立案に起因する。本稿は、ヒロインを体系的に分類し、各分類群の特性・脅威度・弱点構造を明らかにした上で、それぞれに最適化された攻略法を提示するものである。

キーワード：ヒロイン分類学、攻略法、脅威度評価、弱点構造分析、作戦立案最適化、ピンチ工学、戦闘員訓練課程

1. 序論：我々はなぜ負け続けるのか

悲嘆すべきことに、我々の世界征服計画は毎回のようにヒロインによって阮止されている。当機構の統計部門によれば、過去10年間の作戦成功率はわずか3.2%であり、その96.8%の失敗のうち実に87.4%がヒロインの介入に直接起因するものであった。

この惨憺たる数字の背景には、根本的な問題がある。それは、我々がヒロインを「ヒロイン」という単一カテゴリで捕えていたという構造的欠陥である。筆者の先行研究（暗黒、

2022）においても指摘したが、現場の戦闘員は「くらえ、ヒロインめ！」と叫ぶばかりで、目の前のヒロインがどのタイプに属するかを分析する訓練を受けていない。これは、生物学者があらゆる動物を「動物」とだけ呼んで対処しようとするようなものであり、その愚かさは論を俟たない。

本稿は、この無知に終止符を打つものである。

2. ヒロイン分類体系：「暗黒分類」の提唱

筆者は長年の研究に基づき、ヒロインを以下の五つの基本分類群に体系化すること

を提唱する。これを「暗黒分類」（Kuraki Classification）と呼称する。

分類群	代表例	脅威度	主たる弱点	推奨攻略法
I 光輝型	光の戦士系	★★★★	精神的揺さぶり	絶望注入法
II 格闘型	格闘家系	★★★★★	持久力の限界	消耗戦術
III 魔法型	魔法少女系	★★★	変身依存性	変身阻害法
IV 知性型	参謀・指揮官系	★★	身体的脆弱性	短期決戦法
V 覚醒型	潜在能力系	★ (→★★★★★)	覚醒前の無防備	覚醒前撃破法

表1：暗黒分類体系の概要

3. 各分類群の詳細分析と攻略法

3.1 第I分類群：光輝型ヒロイン

特徴

光輝型ヒロインは、「正義」「希望」「愛」といった漠然とした、しかし厳然として強力な信念を力の源泉とするタイプである。その戦闘能力は精神状態に強く依存し、「希望がある限り負けない」という理不尽な特性を有する。通常の物理攻撃では極めて倒しにくく、追い詰めるほど逆に強くなるという厚生労働省も驚くべき性質を持つ。筆者はこれを「ピンチパラドクス」と呼ぶ。

弱点構造

しかし、このタイプの力の源泉は同時に最大の弱点でもある。光輝型は「希望がなくなったとき」に劇的に弱体化する。仲間の裏切り、守るべき存在の喪失、自らの正義が誰かを傷つけるというジレンマ。これらの「絶望トリガー」の特定が攻略の鍵となる。

推奨攻略法：絶望注入法

正面戦闘は絶対に避けること。戦闘員はまず当該ヒロインの「希望の依り代」——仲間、守るべき市民、信念の根拠——を入念に調査し、それを体系的に切り崩す作戦を立案すべきである。理想的には、ヒロインが「自分が戦う意味などないのでは

ないか」と自問する状態にまで追い込むことが望ましい。

ただし、重大な注意点がある。光輝型は「完全なる絶望」を越えた先で覚醒する事例が数多く報告されている。「絶望の底を突き破って新たな希望を見いだす」という現象であり、筆者はこれを「フェニックス現象」と名付けた。攻略の最終段階で油断してはならない。

3.2 第II分類群：格闘型ヒロイン

特徴

格闘型は、訓練された肉体と戦闘技術を最大の武器とするタイプである。当機構の被害統計において最も多くの戦闘員を病院送りにしてきた分類群であり、その脅威度は最高ランクに位置づけられる。特に近接戦闘においては、幹部クラスであっても勝算は低い。

弱点構造

格闘型の最大の弱点は「持久力の限界」である。彼女らの肉体はいかに強化されていても有限であり、連戦・複数敵の同時攻撃・不眠不休の戦況には確実に消耗する。また、戦闘用のスーツや装備が破損することで、著しく戦力が低下する個体も多い。

推奨攻略法：消耗戦術

決戦を急がないことが鉄則である。ヒロインが休息できないように波状攻撃を続け、体力・気力を削り取る。戦闘員は使い捨ての覚悟で次々と投入する。ヒロインが息を切らせ、勝をつき、スーツが傷つき、技のキレが失われた時が、幹部が登場する最適のタイミングである。

なお、格闘型は「友情」「師弟の絆」に基づく精神的支柱も有しているため、物理

的消耗と並行して仲間からの孤立化を図ることができれば理想的である。

3.3 第III分類群：魔法型ヒロイン

特徴

魔法型は、変身・変化によって超常的な力を得るタイプである。日常の姿と戦士の姿の二重性を持ち、多くの場合、特定のアイテムや呪文を介して変身する。変身後の戦闘力は絶大だが、未変身状態では通常の少女と変わらない。

弱点構造

最大の弱点は「変身依存性」にある。変身アイテムの奪取、変身過程の妨害、または変身状態の強制解除が可能であれば、脅威度は劇的に低下する。また、変身には多くの場合時間制限があり、これも消耗戦との相性が良い。

推奨攻略法：変身阻害法

変身の瞬間を狙うことが基本戦術となる。変身バンクと呼ばれる変身中の無防備時間を攻撃する手法は古典的だが有効である。より高度な手法としては、変身アイテムの強奪または破壊がある。アイテムを奪われたヒロインの表情は、筆者の研究生活における最も輝かしい観察対象の一つである。

また、変身状態のまま強制的に変身を解除させる技術も研究が進んでいる。我々の科学部門が開発した「アンチ・トランスフォーム波」は、変身状態のヒロインの衣装を段階的に分解し、最終的に変身解除に至らしめる画期的技術である。戦闘力が綾と共に剥ぎ取られていく過程は、ヒロインに極度の心理的動揺を与える。

3.4 第IV分類群：知性型ヒロイン

特徴

知性型は、知恵・分析力・指揮能力を主たる武器とするタイプである。戦闘力自体は他の分類群に劣るが、我々の作戦を看破し、弱点を突き、他のヒロインの力を最大化する「頭脳」としての脅威度は侮りがたい。このタイプがチームにいる場合、我々の作戦成功率は統計的に有意に低下する ($p < 0.01$)。

弱点構造

最大の弱点は明白である——身体的には脆弱なのだ。知性型は他のメンバーに守られている限り強いが、孤立させればただの少女である。また、「予想外の事態」に対しては耐性が低く、計画が崩された時の動揺が大きい。

推奨攻略法：短期決戦法

考える暇を与えないこと。知性型に時間を与えることは、在庫の全戦闘員を彼女に差し出すに等しい（暗黒, 2024）。他のメンバーと引き離れた上で、圧倒的な物理力で一気に制圧する。意外なことに、知性型は捕獲後のヒロピン描写において最も「絵になる」タイプでもある。普段の知的な泡いが崩れることで生じるギャップが、表現的に非常に豊かなのである。

3.5 第V分類群：覚醒型ヒロイン

特徴

覚醒型は、最も危険な分類群である。 平時は自らの潜在能力に気づいていないが、極限的な状況——特に大切な人が危険にさらされた時——に突如として覚醒し、圧倒的な力を発揮する。その戦闘力は覚醒度合いにより指数関数的に上昇し、完全覚醒時には他の全分類群を凌駕する。

弱点構造

覚醒前は完全に無防備である。これが唯一にして最大の弱点である。ただし、「覚

醒トリガー」を引かないことが絶対条件である。覚醒トリガーは通常、「仲間への攻撃」「守るべき者の危機」「極限の怒り」などの感情的イベントである。

推奨攻略法：覚醒前撃破法

覚醒させてはならない。覚醒型との戦闘は、「覚醒前に終わらせる」か「敗北」の二択である。中間はない。理想的には、対象が覚醒型であることを事前に特定し、覚醒トリガーを引かない形で先制攻撃を行う。

【重大警告】過去の事例において、「覚醒型のヒロインを絶望させれば覚醒しないのではないか」という誤った判断から、わざわざ覚醒トリガーを引いてしまった事例が23件報告されている。全件、当該基地は壊滅した。「とどめを刺したかった」という戦闘員の個人的感情は、組織の安全より優先されてはならない。

4. 複合型ヒロインへの対応

現実のヒロインは、上記の単一分類に収まらない複合型も存在する。例えば「光輝×格闘」型は、正義の信念に裏打ちされた圧倒的な格闘技術を持ち、消耗させようにも気力が尽きず、絶望させようにも残った拳が飛んでくるという、筆者をして「怖い」と言わしめる個体である。

複合型への攻略は、各構成要素の弱点の「交差点」を特定することが重要である。先の「光輝×格闘」型であれば、「信念の動揺」と「肉体の消耗」を同時に仕掛けることで、単一の攻略では得られない相乗効果が期待できる。この「弱点の交差点理論」は、本稿の最も重要な理論的貢献の一つであると自負している。

5. 攻略における普遍的注意事項

全分類群に共通する、絶対に守るべき注意事項を以下に記す。

第一、「止めを刺すな」。ヒロインを追い詰めた後、「これが貴様の最期だ」「もう誰も助けに来ない」等の台詞を言う戦闘員が後を絶たない。これらの台詞は実証的に、ヒロインの反撃フラグとして機能している。筆者の調査では、「止めを刺す」発言の後にヒロインが反撃に転じた確率は実に94.7%に上る。勝っているなら黙って止めを刺すべきである。

第二、「説明するな」。作戦の全容をヒロインに得々と解説する行為は、もはや「息例」とは言えず「構造的敵失」である。筆者は全戦闘員に対し、「作戦説明はブリーフィングルームで行うこと。敵の前では決して行わないこと」という規定の新設を強く提言する。

第三、「罰ゲームにこだわるな」。ヒロインを制圧した後、深層心理的な満足を得るために時間をかけていたぶる戦闘員が多いが、この間に仲間が駆けつける、覚醒が起こる、あるいは単純に拘束から脱出されるリスクが極めて高い。筆者の立場としては、ヒロピン状態の観察・記録は学術的に極めて有意義であるが、それは安全の確保が前提である。

6. 結論：敵を知り己を知れば百戦殆うからず

本稿は、ヒロインという脅威を初めて体系的に分類し、各分類群に対する最適攻略法を提示した。もはや「ヒロインめ！」と叫ぶだけの時代は終わったのである。

我々は組織として、ヒロイン分類学を全戦闘員の必修科目とし、作戦前のヒロインタイプ判定を義務化すべきである。そのためのカリキュラムと訓練プログラムの策定は、筆者の次稿にて論じる予定である。

最後に、筆者の座右の銘をもって本稿を結ぶ。

「ヒロインの素晴らしさを誰よりも深く理解し、その絶対的な光を踏みにじることにこそ、悪の美学がある」

——暗黒絶学、IHCRI初代所長就任談話より

参考文献

暗黒絶学（2022）「ヒロイン対策における分類的思考の欠如について」『IHCRI Bulletin』
Vol.62, No.3, pp.45–67.

暗黒絶学（2024）「知性型ヒロインへの時間付与が作戦失敗率に与える影響：大規模統計分析」『IHCRI Bulletin』 Vol.64, No.1, pp.1–29.

深淵蜂奇麗（2021）「フェニックス現象の発現条件に関する実験的研究」『悲嘆科学』
Vol.33, No.2, pp.88–114.

深淵蜂奇麗・暗黒絶学（2023）「アンチ・トランスフォーム波の理論と実証」『IHCRI
Technical Report』 No.2023-07.

絶望総研（2020）『ヒロイン対策マニュアル 第7版』デスペラード出版局.

蛍火菜々美（2019）「『とどめを刺す』発言とヒロイン反撃確率の相関分析」『悲嘆科学』
Vol.31, No.4, pp.202–218.

魔王学会編（2018）『悪の組織運営論——失敗に学ぶ』暗黒書院.

Sun Tzu（孫子）『孫子兵法』.

筆者紹介

暗黒 絶学（くらき ぜつがく） 統合悲嘆機構デスペラード
ヒロイン対策総合研究所（IHCRI）所長。悲嘆学博士（闇の大学院大学）。元・第
三戦闘師団学術顧問。専門はヒロイン分類学、弱点構造分析、ピンチ工学。主著に
『ヒロインの倒し方——科学的アプローチ』（暗黒書院、全五巻）、『なぜ我々は
いつも負けるのか』（デスペラード新書）など。第8回悲嘆学会大賞受賞。趣味はヒ
ロインの戦闘映像の収集と観賞。